

特集

# 石橋群

市指定文化財 世知原、吉井地域の

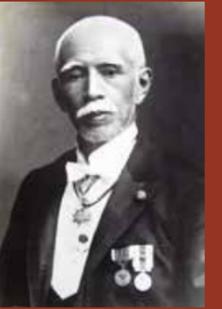
九州には、熊本の通潤橋や長崎の眼鏡橋などに代表されるように、文化的価値の高い石橋が数多く残されていますが、本市にも、かつての歴史を今に伝え、見た目にも趣深い石橋がたくさんあることを皆さんはご存じですか？ 今回の特集では、県内でも屈指の集中域で、市の文化財にも指定している世知原、吉井地域の石橋を紹介し、石橋が造られた背景やその特徴などをお知らせします。



石橋橋 (P9世知原マップ13)

佐々川支流の路木場川に架かる、その名も「石橋」という名称の石橋。橋高は祝橋に次いで高く、両岸が切り立った断崖になっていることもあり、難工事であったことが想像されます。尾崎橋や祝橋など同様に、両岸の断崖を加工して橋台とするなど、世知原地域に伝わる伝統的な手法で架けられています。橋の上流側にある緩やかな滝などとともに素晴らしい景観を形成しています。1907(明治40)年架橋 橋長8.9m 橋幅3.2m 橋高10.1m

# 炭鉱と石工と中倉万次郎



中倉万次郎

本市の北部地域には数多くの石橋が残されており、世知原では17基、吉井では8基が市指定有形文化財となっています。これらの地域には、なぜたくさん石橋が造られたのでしょうか。主な理由として、次の3つが挙げられます。

一つ目の理由は、かつて発展を遂げた「炭鉱」に関係があります。当時、石炭はトロッコなどを使って運んでいましたが、重量が大変重かったため、それまでの木橋や土橋では傷みが早く、すぐに架け替えをしなくてはなりません。そのため耐久性に優れた石橋が使われるようになったといわれています。石橋は「一度架けると百年以上もつ」といわれるほど堅牢さに定評がありました。

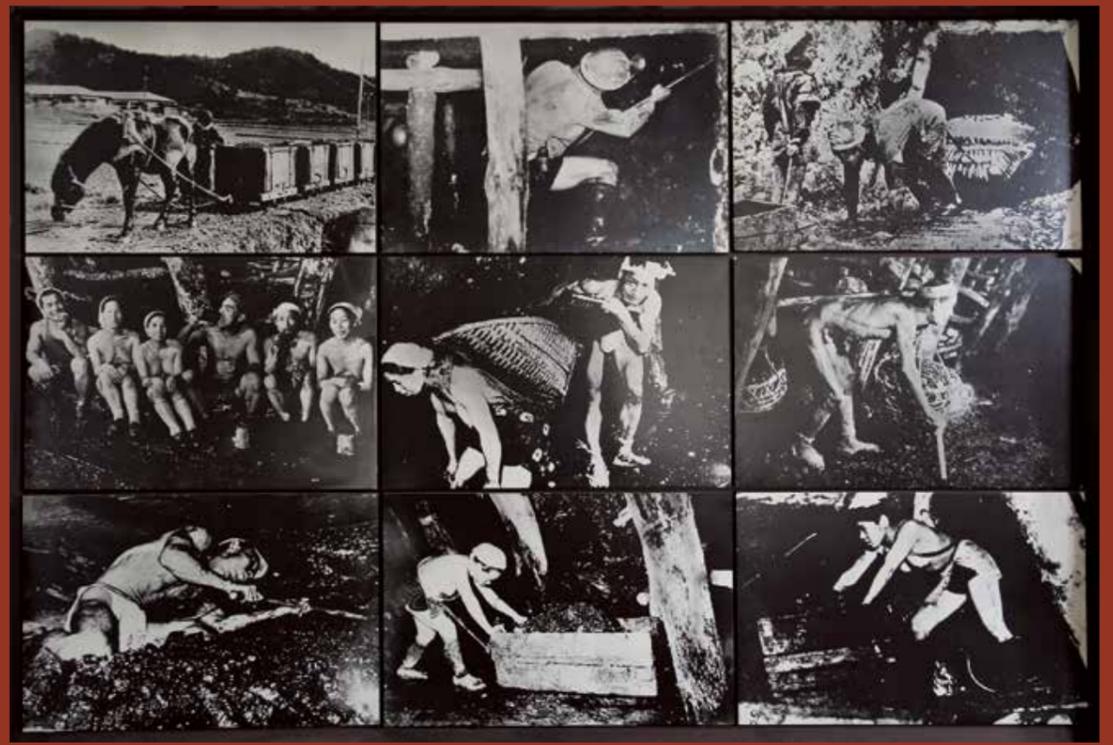
二つ目は、「石材」と「石工」の存在です。当時、この地域では石橋の材料となる石が豊富に採れ、石材を加工する技術を持った石工も数多くいました。今でもこの地域の古い農家などには高く築かれた石壁が数多く残されており、当時の加工技術の高さを感じることが出来ます。

三つ目は、石橋の建設を推進した中倉万次郎氏の存在です。1849(嘉永2)年、現在の吉井地域に生まれ、世知原地域の中倉家で育った万次郎は、若くして平戸藩松浦家に仕えました。明治維新後は自由民権運動に参加し、83(明治16)年に35歳で長崎県会議員に当選。特に交通網の整備に力を入れ、木橋や土橋が多かった時代に石橋の建設を積極的に推進しました。

1902(明治35)年、世知原村長時代に帝国議會議員に立候補し当選を果たした万次郎は、実業家松尾良吉などと佐世保軽便鉄道を設立したほか、佐世保―伊万里を結ぶ「伊佐線」の建設などに尽力し、石炭輸送や住民の輸送に大きく貢献しました。

## 石炭のまち「世知原」

石橋が造られる背景となった「炭鉱」ですが、当時、石炭は「黒いダイヤ」と呼ばれ、日本の経済を支える貴重な資源となっていました。九州でも盛んに採掘が行われ、県北地区にも「北松炭田」という大規模な炭鉱がありました。北松炭田の一つ、世知原で石炭の採掘が始まったのは1891(明治24)年のこと。最初の炭鉱は「国見炭鉱」という名称で、今の城山団地の近くにありました。93年には「松浦炭坑」が開鉱し、世知原の近代炭鉱の基礎を作りました。世知原―佐々間を結ぶ「松浦炭坑鉄道」を開通させるなど、さまざまな炭鉱施設を建設し、県内では高島炭鉱に次ぐ第2位の生産量を誇る炭鉱に成長しました。



大規模な炭鉱では女性の坑内労働が禁止されていましたが、個人単位で経営されるような小規模な炭鉱では、戦後まで女性の坑内労働が行われていました。その多くは夫婦や家族単位で作業に従事していたようです。炭坑内は出水や落盤、ガス爆発など常に危険と隣り合わせの過酷な現場であり、炭鉱資料館の敷地にある慰霊碑にも坑内事故で亡くなった女性労働者の名前が刻まれています。

## 資料館が伝える

## 炭鉱の歴史



坑内電話



(上)「松浦三尺層」と呼ばれた世知原地域の石炭層(中)人力による採掘が行われていた時代に作業員が使用した「つるはし」や「ピッケル」(下)携帯用湿度計



県指定有形文化財  
世知原炭鉱資料館  
(旧松浦炭坑事務所)

1970(昭和45)年3月に閉山するまでの約60年間、石炭産業の盛衰とともに、松浦炭坑の本部事務所として使用されてきました。現在は世知原炭鉱資料館として、当時の歴史を今に伝えるため、さまざまな資料を展示しています。建物は県北地域の洋風建築の遺構として珍しく、また炭鉱関係の遺構という点からも貴重な存在となっています。

世知原町栗迎83-5  
開館時間 9時～17時  
☎社会教育課 ☎24-1111



社内の売店で食糧や生活用品を購入していた金券



電気発破器(ダイナマイトの起爆スイッチ)



石炭を採掘する現場(切羽)で、作業員を保護するため、天井の岩石が落ちないように支える機械。天井を支える枠が自動的に進むので「自走枠」と呼ばれ、前方には石炭を掘るための採炭機械などが取り付けられていました。

# 個性豊かな 石橋群

かつての炭鉱の歴史や石橋の建造技術などを物語る世知原、吉井両地域の石橋には次のような特徴があります。

佐々川上流に架かる世知原地域の石橋は、主に明治期から昭和初期にかけて造られました。江戸時代からの伝統的な技法や明治以降に導入された近代的な技法など、さまざまな技法で造られているのが特徴です。また、用いられた材料も多様で、個性豊かな橋が多いことも特徴の一つになっています。

一方、佐々川本流と支流の福井川に架かる吉井地域の石橋は、大正末期から昭和初期にかけて完成しました。世知原と異なり、ほとんどが近代的な手法で造られているのが特徴です。また、吉井地域には、国有形文化財に登録されている松浦鉄道のコングリートアーチ橋「福井川橋梁」「吉田橋梁」「吉井川橋梁」も現存しており、曲線で構成された橋の姿が周囲の風景とともに、優美な景観を作り出しています。

本市にはこのほか、黒髪町にある上市場橋や上犬尾橋、白砂橋のほか、祝田橋（上原町）、藤山神社の神橋（小舟町）など、趣のある石橋が数多く残されており、そ



吉井川橋梁

の数は市内全域で65基（アーチ橋45基、桁橋20基）にも上ります。本市では貴重な文化財をできるだけ現在の状態で保存し、後世に伝えていきたいと思っておりますので、市民の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



## 世知原地域の石橋群マップ

- ①高観寺橋 ②龍ノ氏橋 ③小岩橋 ④古山橋 ⑤尾崎橋 ⑥桐ノ木橋 ⑦泉橋 ⑧山口橋 ⑨倉淵橋 ⑩奥ノ口橋 ⑪丑太郎橋 ⑫野田橋 ⑬石橋 ⑭祝橋 ⑮岩下橋 ⑯前原橋 ⑰曲川橋



## 吉井地域の石橋群マップ

- ①古野橋 ②板樋橋 ③松原2号橋 ④橋川原橋 ⑤曲川橋 ⑥前岳橋 ⑦春明橋 ⑧樋口橋



### ①小岩橋 (P9世知原マップ③)

両岸に築かれた石垣を橋台として大きな自然石の板石を架け渡しています。このように一枚岩を渡したような橋は「桁橋」(盤石橋)と呼ばれており、文化財指定を受けているものでは唯一の存在となっています。  
架橋年不明 橋長2.9m 橋幅1.3m 橋高2.8m

### ②奥ノ口橋 (P9世知原マップ⑩)

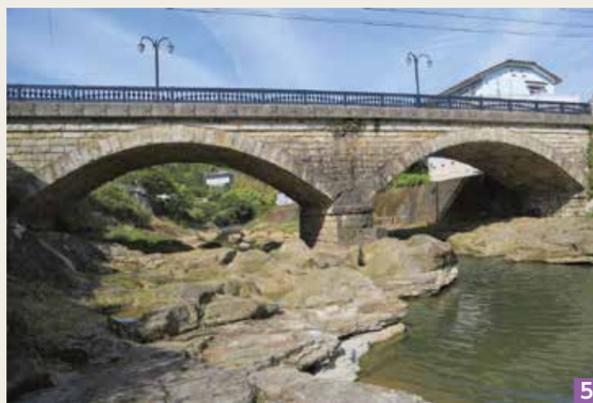
佐々川支流の鍋田川に架けられています。合流点に近く、橋の直下には滝もあります。水害のために壁石の半分が流されていますが、輪石(アーチ)は残っています。石橋の主構造体となる輪石の強さを示す貴重な橋です。  
1926(大正15)年架橋 橋長3.4m 橋幅1.7m 橋高2.2m

### ③丑太郎橋 (P9世知原マップ⑪)

川を越えて農作業を行うために個人が架けた橋で、架けた人の名前が名称になっている珍しい橋です。上流にある野田橋も同じ人が架けたもので、兄弟橋になります。砂岩の切石は使わず、付近の自然石を組み合わせて造られています。  
大正期に架橋 橋長5.3m 橋幅1.8m 橋高3.0m

### ④尾崎橋 (P9世知原マップ⑤)

橋の両側は急峻な断崖絶壁で、架設時の困難が偲ばれます。兩岸の断崖上部を加工して橋台とし、「輪積」と呼ばれる珍しい技法を用いて造られています。世知原地域で架橋年が分かっている中では最も古い橋になります。  
1897(明治30)年架橋 橋長6.7m 橋幅3.6m 橋高9.0m



### ⑤樋口橋 (P9吉井マップ⑧)

佐々川流域に架かる唯一の二重アーチ式石橋で、最大の大きさがあります。皇居の二重橋をモデルにしたといわれています。  
1922(大正11)年架橋 橋長36.0m 幅員6.4m 橋高7.5m